

「オービック・スペシャル・コンサート2006 ～コバケンの 日本の歌～」

★★★★★

2006（平成18）年3月7日鑑賞＜東京・サントリーホール＞

＜今年のプログラムは？＞

今年のプログラムは次のとおり。

指揮：小林研一郎

ソプラノ：森麻季

テノール：中鉢聡

管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団

曲目

千夜一夜物語

①リムスキー＝コルサコフ 交響組曲『シェエラザード』 o p . 3 5

I. 海とシンドバッドの船

II. カレンダー王子の物語

III. 若い王子と王女

IV. バグダッドの祭り～海～船の難破

日本の情景

I. 早春賦（オーケストラ演奏）

II. 荒城の月（テノール）

III. からたちの花（ソプラノ）

IV. 椰子の実（ソプラノ）

V. 宵待草（ソプラノ）

VI. 赤とんぼ（オーケストラ演奏）

VII. さとうきび畑（テノール）

VIII. この道（ソプラノ）

IX. 浜辺の歌（ソプラノ&テノール）

＜今年のプログラムの特徴は＞

今年のプログラムの特徴は、演奏を前半の『シェエラザード』1つにしぼり、後半を歌曲にしたこと。歌うのはテノールの中鉢聡さんとソプラノの森麻季さん。さて、そのはじめての趣向の成否は・・・？

＜久しぶりに聴く大好きな『シェエラザード』に感激＞

『シェエラザード』は、残忍な王シャリアールに嫁いだシェエラザードの処刑を1日延ばしにするため、シェエラザードが王に対して千一夜にわたって語り聞かせたという千夜一夜物語（アラビアン・ナイト）を素材とした有名な交響組曲。

「王さま、王さま、これから私が面白いお話を語ってさしあげます・・・」というセリフが浮かんでくるような美しいバイオリンの旋律とハーブの音色が印象的で、一度聴いたら忘れられないもの。

さらに、「シンドバッドの冒険」をイメージした、荒海を乗り越えて進んでいく船を彷彿させるメロディも印象的でよく覚えている。このようにこの曲はファンタスティックな物語と、ダイナミックな音楽との融合が絶妙で、かつて私はLPレコードがスリ切れるほど、何十回も聴いたもの。約40分の大作だが、観客は飽きることなくこの名曲に聴き入ることに・・・。

＜はじめて目の前で聴くテノールとソプラノにビックリ！＞

オペラを聴くぞと意気込んで行けば話は別だが、コンサートでテノールやソプラノを聴くことはあまりないもの。また、テレビでやっても、それをジッと観ていることはあまりない。したがって、はじめて目の前で聴く、本格的なテノールとソプラノの歌声にはただビックリ・・・。

＜アンコールは？＞

普通、アンコール曲は最初から予定されているものだが、コバケンさんの言葉によれば、今回はそうではなかったよう（？）で、①特に予定していない、②日本の歌曲はもういいだろう、③何か得意なオペラの曲を、ということになった。さらにそのために、何と「ボクがピアノを弾きますから」ということに。そこで展開されたコバケンさんのピアノ伴奏による中鉢聡さんと森麻季さんの得意曲の披露に観客はヤンヤンヤの大拍手となったことは言うまでもない。

＜ラストの盛りあがりは？＞

演奏会がラストに盛りあがるのは、観客も一体となって手をたたきリズムをとりながら、アンコール曲とともに楽しむというスタイルが多い。しかし、今回は後半を歌曲としたために、ラストは「皆さんも一緒に」という趣向。そしてその曲は、日本人なら誰もが知っているあの『ふるさと』。中鉢聡さんと森麻季さんの美しい歌声に混じって、私も大きな声で歌ったことは言うまでもない・・・。

＜9時前に帰ろうか、最後まで残ろうか・・・？＞

今回の東京でのコンサートはうまく仕事と絡ませて行ったものだが、最終の新幹線に乗るのはムリだろうと考えて、最初から今日は東京在住の息子の部屋に泊まろうと予定していた。息子は2005年4月から第59期司法修習生となり、池袋近くの要町のワンルームマンションを借りて住んでいるが、今までそこを1度も訪問したことがなかったため、1度は行ってみようと思っていたものだ。しかし、歌曲の進行状況を見ていると、アンコールを省略して、タクシーを飛ばせば、最終9時18分ののぞみに間に合いそう。そこで「9時前に帰ろうか、最後まで残ろうか・・・？」とかなり迷ったが、せっかくの機会だからとやっぱり帰るのはやめて、最後まで聴くことに。その結果、コンサート終了後は2人で要町でラーメンを食べ、はじめて息子の部屋に泊まるという経験を・・・。コンサートのおかげで、こんないい経験をする事ができたことに感謝・・・。